

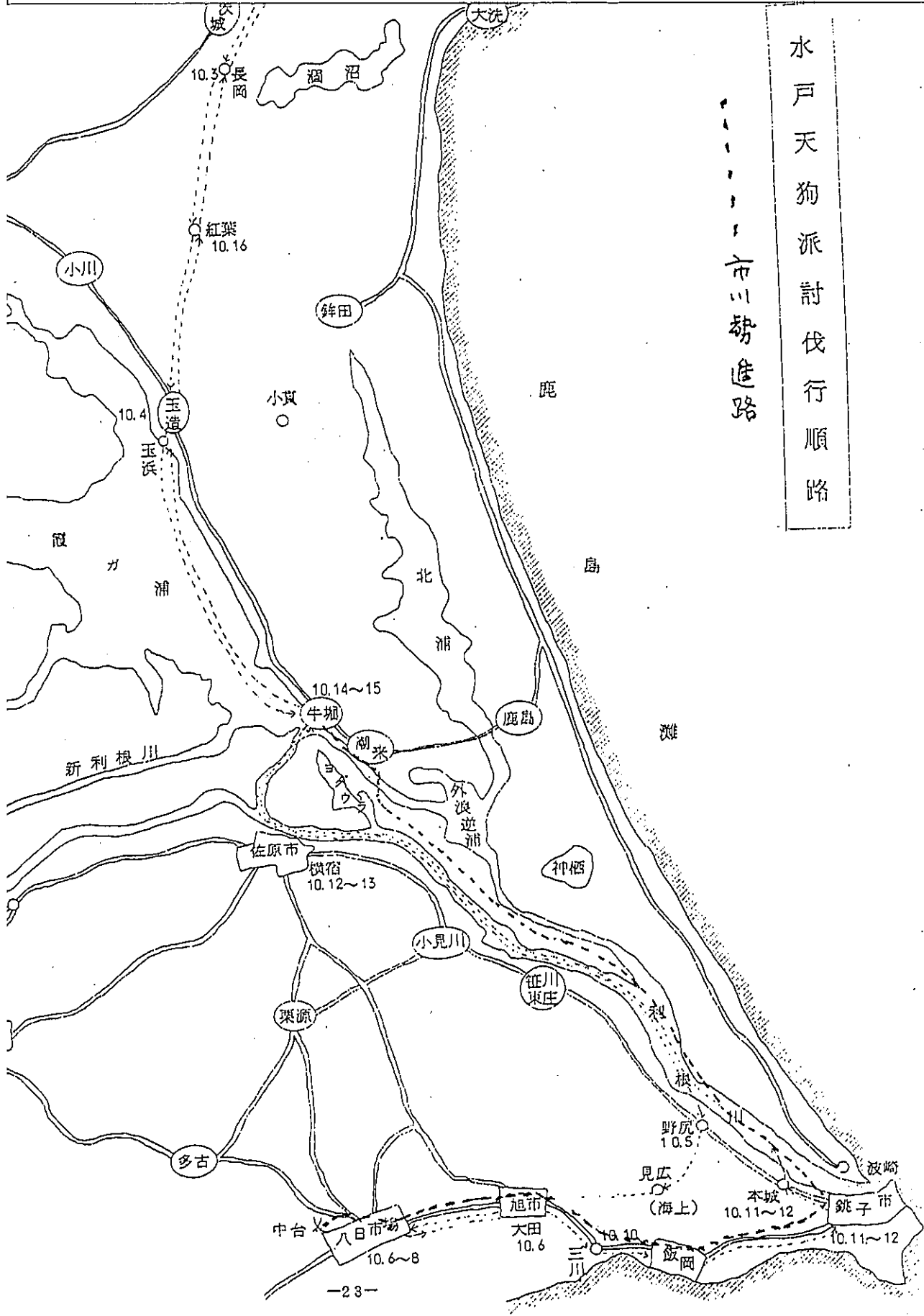
脱走塚百年記念

松山戦争集録

百年祭執行協賛会

水戸天狗派討伐行順路

市川勢進路



九月廿九日  
速證真源信士 水府中人殺  
木村真補

九月廿四日  
覺院知鈿法性信士 水府中人殺  
四多依而死

九月廿二日

周明院受炮發性信士 水府中人殺  
下町而死  
大森金六郎

十月十二日  
是宜信士 水府中人殺  
四多依而死

九月廿七日

觀輪應信士 水府中人殺  
四多依

十月二日  
善照清信士 水府中人殺  
下町

二月十九日  
親性信士

水府中人殺  
治其樹

七月廿二日

蓬至所匿信士 水府中人殺  
言野彦生樹

九月廿五日

周明院受炮發性信士 水府中人殺  
下町而死  
大森金六郎

水府中人殺  
大森金六郎

照見妙心信女 何屋屋

知識童女 志保屋

修待妙戒信女 延屋

妙戒信女 延屋

修待信女 延屋

修待信女 延屋

修待信女 延屋

修待信女 延屋

修待信女 延屋

修待信女 延屋

修待信女 延屋

觀性信士 法三附

觀性信士 法三附

觀性信士 法三附

觀性信士 法三附

觀性信士 法三附

觀性信士 法三附

觀性信士 法三附

觀性信士 法三附

觀性信士 法三附

觀性信士 法三附

觀性信士 法三附

觀性信士 法三附

觀性信士 法三附

觀性信士 法三附

觀性信士 法三附

觀性信士 法三附

觀性信士 法三附

觀性信士 法三附

觀性信士 法三附

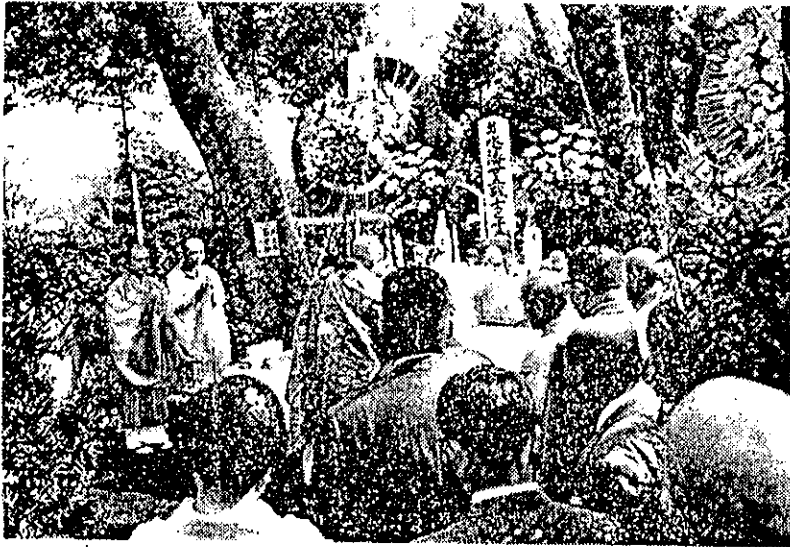
觀性信士 法三附

觀性信士 法三附

觀性信士 法三附

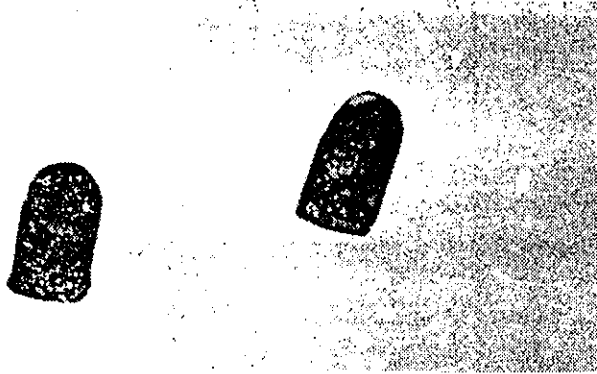


脱走塚全景

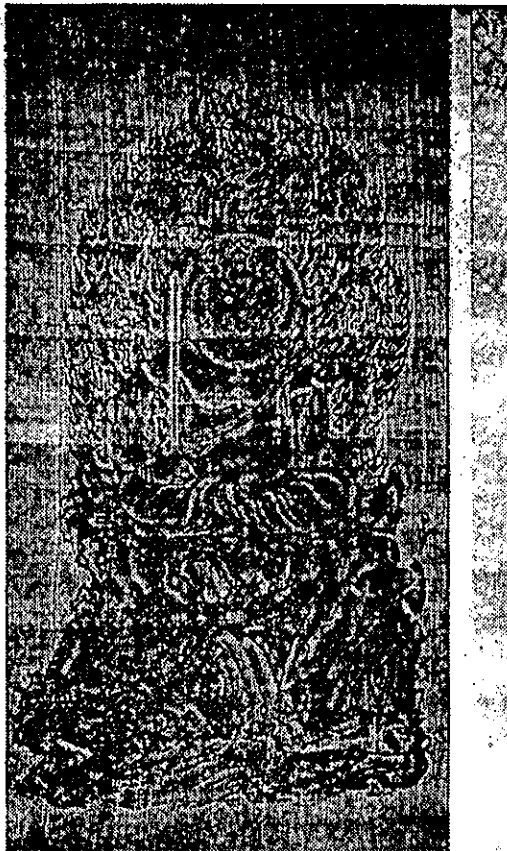


脱走塚百年祭供養宴





松山戦争使用弾丸  
(重量37g 長さ25mm 口径15mm 内径10mm)



市川三左衛門持仏不動尊画像

---

---



目次

一、序文	八日市場市教育長 林 吉 郎	7
二、追悼の辞	水戸市長山本 敏 雄	9
三、脱走塚百年祭執行趣意書		11
四、当日の日程		12
五、百年祭経過のあらまし		13
六、松山戦争——文献		15
七、奸賊打取並討死控——日記及び討取連名		20
八、関係地図		23
九、水戸藩志士弔魂碑文——朝比奈知泉文集より		27
十、松山戦争——匝差郡誌より		28
十一、戦死者氏名校合表		29
十二、校合表についで		31
十三、さふさのおちば		32
十四、松山戦争聞き書き		41
十五、編集後記		43



# 記念誌発刊にあたって

昭和四十一年十月十四日、当市は史蹟脱走塚の百年祭を執行した。この日市長以下市の有職者多数が、またはるばる水戸市よりは、山本市長代理として大高助役、遺族代表朝比奈七雄、吉沢とし子両氏と県、市の関係職員、牧大介氏、関孤円氏らが臨席された。外に、以前より数回足を運ばれて、脱走塚を通じて水戸市と本市との交流に努力された北関東開発社長山本秋広氏が特に臨席され市民約三百名の参加を得て、厳肅盛大に法要が営まれたのである。

百年祭を記念して当市在任の富田理助遺族、大中こう氏が碑を建立し、そこにかくれて天狗党を狙撃したというゆかりの櫓の木も国保病院から移植され、供養の準備は、すがすがしく整えられてあった。

脱走塚所在のあたりで、百年前に戦われた松山戦争は、水戸藩勤王佐幕の終戦であり、これによって、常総の地に、明治維新の曙光が輝きはじめたのである。その後、明治、大正、昭和の三代にわたり、わが国は、近代国家への成長のために、さまざまの苛烈な試練を経て、今や産業経済貿易文化の各方面にわたり、ゆるぎない国際的地歩を占めるに到った。

このように時は移り世は変って、明治維新のたたかいても、すでに遠い昔語りとなり、戦士の骨も土と化して故人の祀つた塚のみが、ここに残った。

地下に眠る二五士の霊が、もしもこの日本の現状、さては故郷茨城県ならびに水戸市の近代的興隆の姿を

まのあたりには眺めたとしたらどんな感慨に打たれるであろうか。

当市は百年祭法要を記念して、ようやく消えようとする口碑を綴り、資料をただして、ここに脱走塚由来資料を編集することとした。その衝には大川運一氏が当り、驚塚堂之助氏、土屋謙四郎氏、山崎信治氏らがこれを援助した。そのご努力に対して深く敬意を表したい。

尚、水戸市山本秋広氏のご奔走により、茨城県ならびに水戸市より弘道館の梅の、名木の苗木三十本が脱走塚に移植され、将来永く水戸武士の烈々たる気魄を伝えるかの様に、芳香を放つことになった。殊に山本氏が旧藩主徳川公より、その邸内の梅五本を請い受けて墓域に移植寄贈されたことは、百年の歳月をへだて、二五士の枯骨の上に、今あらためて旧藩主の温かい慰めが、しづかに透みとおるものと謂えないであろうか。水戸をはなれること数十里、時の勢い同胞相戦つて敗れた戦士らが、ここ東総の地に骨を埋めて百年、勤王と謂い佐幕と謂いその恩讐も霧消した今日、後世多感の水戸の人たちが、しづかにこの脱走塚に思いを寄せられて、その冥福を祈られることを、心ひそかに期待したのである。

終りに百年祭執行ならびに脱走塚環境整備に惜しみないご協力を賜わった関係者、特に遠隔の地水戸の方々をはじめ、各方面多数の方々に深く深く感謝を申上げて発刊の辞といたしたい。

昭和四十二年五月

八日市場市教育長

林

吉

郎

# 追悼の辞

秋風さわやかなる千葉県八日市場松山台の墓地に眠らるゝ水戸藩家老朝日奈弥太郎泰尚殿以下二十余柱の御靈の御前に水戸市民を代表して謹みて申し上げます。

あなた様方は内外の國情ようやく多難ならんとする時水戸藩旧臣の家に生を享けられ烈公の新政に際会して怡勤勉勵よく奉公の誠を致されました。

しかるに國家の艱難日に増すに従い藩論分裂して不幸にも対立を見るに至りことに烈公の夢後尊王攘夷の運動激化してとかく徳川幕府三百年の恩義を無視する者あるを憂い更に丁卯戊辰の一新に際しては薩長のために宗家の覆えざるを黙止するに忍びず遂に或いは越後の野に或は会津の城に転戦して辛苦を舐め更に帰つて水戸城に拠らんとするや弘道館において藩兵と同胞相戦うの慘事に至りましたこと、洵に悲運の勢いと申すべきかと拝察いたします。

しかも戦ひ利あらず下総に奔つて八日市場に達せられた十月六日という日に藩兵の追撃を受けて比地に激戦となり、不幸にも異郷にその生涯を終られました。御胸中を察しますときその御無念如何ばかりかと拝するものであります。蓋しその時わが國の歴史の一大轉換の日であり、六百年の武家政治の廢せられて王政古之にかえるための苦しい一瞬でありました。

あなた様方が徳川家の大事に際して親蕃としての義を全うしようとされましたことを私共日本人の美風と

して心なだれるものがあり、幸にしてそれより庶政一新し聖徳のものとするに官職の別無く警敵の怨みを捨て、国民心を一にし共に艱難を打開して国運の発展に尽し今やこゝに百年の歳月を算うるに至りました。おかげでもこゝ八日市場の方々はあなた様方のために基石を建てて供養を続けて来られこの度は協賛会を結成し執行委員を定めて基地を整備すると共にその事蹟を明かにし今日十月十四日心をこめて百年祭を執行されるに至りました。この事は不幸な最後を遂げられたあなた様方の以つて地下に冥すべく御遺族の方々の心を安んぜらるべきことと信じます。

又私共水戸市民も当地の温い御厚情に深い感激と感謝の念を禁し得ぬものがあります。希わくば今日こゝに御霊を慰め御冥福を祈らんとする私共の至誠を受けられまして国家の平安と八日市場水戸両市の発展を護り給わんことを。

昭和四十一年十月十四日

水戸市長 山本敏雄



## 当 日 の 日 程

### (一) 法要順序 (脱走塚)

- |           |                    |
|-----------|--------------------|
| 1, 開会のことば | 執行委員長              |
| 2, 法 要    |                    |
| 3, 祭主祭文   | 協 賛 会 長<br>水 戸 市 長 |
| 4, 焼 香    |                    |
| 5, 閉会のことば | 執行委員長              |

### (二) 供養宴順序 (農業センター)

- |            |           |
|------------|-----------|
| 1, 開会のことば  | 執行委員長     |
| 2, 主催者あいさつ | 協 賛 会 長   |
| 3, 来賓のことば  |           |
| イ 市 長      | 布 施 章     |
| ロ 水戸市代表    |           |
| ハ 県議会議員    | 宇 野 享     |
| ニ 市議会議員    | 岩 井 彪     |
| ホ 前 市 長    | 太 田 福 次 郎 |
| ヘ 遺族代表     |           |
| 4, 閉会のことば  | 執行委員長     |
| 5, 宴 会     |           |



## 脱走塚百年祭経過のあらまし

一、明治六年十月六日 八日市場市松山台にて水戸藩士天狗派と書生派の戦いあり、戦死二十五人の墓が地元民のねんごろなあつかいにより、脱走塚として祭られ、それ以来今日まで地元民の手で守られてきた。

二、大正五年十一月十日、弔魂碑が建てられた。碑文は朝比奈知泉先生の選であり当時の地元県会議員関浩己先生の謹書である。

三、元匪磯村長及び市文化財審議委員であつた故山崎滝三先生が特に力を入れられ、市の文化財として昭和三十五年三月二十日に指定された。

○昭和四十一年二月二十日水戸学の大家、水戸高等学校名越時正先生は水戸藩士天狗党、書生党両党争いの史蹟脱走塚調査のため当市に來訪され、歴史家としてこの事件を公平に正しいとの強い意向がありましたので、太田前市長の熱意と文化財審議会、及び郷土史研究会の熱意等により、資料の散乱する恐れがあるため、この際正確な資料を完備したいという熱望が実を結び百年祭執行の第一回打合せ会を開いた。

○昭和四十一年三月四日 実行委員会発足

○昭和四十一年三月二十七日 脱走塚で実行委員会主唱で法要をいとなむ。

○昭和四十一年六月八日 実行委員会開催

○昭和四十一年七月七日 実行委員会開催

○昭和四十一年九月十四日 実行委員会開催

同日 協賛会発足 会長 山崎 恒

○文獻委員会及び式典委員会等随時開催

○昭和四十一年十月二日 実行委員会開催

同委員会において次の事項について協議決議する。

- (1) 祭典期日、及び会場 昭和四十一年十月十四日午前十時から脱走塚で実施する。
- (2) 記念誌の発行 祭典と切り離し正確な資料をつくり十二月配本の予定
- (3) 百年祭記念碑の建立
- (4) 記念植樹 脱走塚より移植した椿を植え変える。梅桜などの植樹
- (5) 参道階段の新設
- (6) 塚現場の整備

◎文化財条例の改正要望事項

文化財保護に関する条例附則第二項「予算に関係ある第十条、第十一条、第十五条第四項は当分の間適用しない」を削除し、維持管理などの費用に補助できるようお願いしたい。市文化財整備の第一号として順次資料整備をすすめ、市史編算の手がかりにしたい。

# 松山戦争

(大川すみ江書写本)

……  
コトニ水戸三十五万石ノ御家ニ御家督相統ノ御無之、依テ岡崎平兵様ヲ始トシテ其余ノ者他家ヨリ御養子ヲ奉入可申ト評議区ニナリ、然ルニ御老君ノ御子息慶三郎棟御家督相統ニ極リ、前中納言様稱シ奉ル安国呉康集天龍起リ、虎嘯イテ風起リ相物ノ惑ズル自然ナル者ナリ。此君至テ勇将ニテ太平ノ時節鳥狩ト云フ事ヲ始メ、或ハ十千ノ隨、或ハ十二支ノ備トテ軍議ヲ催ス。相隨フ人ヲ天狗派トイフ。御子中納言様至テ賢明ノ君ニシテ相隨フ人ヲ柳派トイフ。此ヲ諸誠派ト稱ス。然ルニ先年前中納言様御逝去ノ後天狗派諸誠派不和合國戰ニ及ビ、天狗派破ルルニ及ビ水府御家中一同諸誠派ニ相成、然ルニ当今一橋卿右天狗派の人々座ニ有之テ江戸小石川御屋敷ニ御入り、水府御本城へ入府ニ相成リ、其節諸誠派ノ人々御城ヲ明ケ渡シ奥洲又ハ越ノ國へ散乱ス。然ルニ当九月諸誠派ノ軍勢越後地ニ於テ旗上致シ押出シ、同月二十六日ヨリ十月一日迄水戸御城下ニ於テ大合戦ニ相成リ、終ニ諸誠派ノ人々一方ヲ抜キ下総銚子表へ敗走ス。明治元年常州水戸天狗派ハ在城致候処、諸誠派ノ逆勢越後地ヨリ押シ出シ 九月二十六日ヨリ大合戦ニ相成リ、

最初ハ諸誠派大勝利ニテ弘道館迄雖乘取兵糧無之、其上朔日ノ大合戦ニ八方ヨリ攻立テラレ、終ニ諸誠派敗北致シ、夫ヨリ逃走、下総國小見川ニ上陸セントスル処、小見川陣中ヨリ大勢押出シ、軍船ト見受ケ、大炮ヲ打掛ケレバ其儘無廻銚子へ下リ、松平右京亮殿へ降参仕候者八十九人。余ハ飯岡村ニ来リ、夫ヨリ椎名内村中谷里村、神宮寺村へ参リ、夫ヨリ東小笹村ヨリ富谷村ニ来リ、十月三日八日市場村着、頃昼四ツ時ナリ。天狗派益々追来リ、敗兵ノ大将朝比奈弥太郎、市川三左衛門、寛助大夫、佐藤凶齋ヲ初メトシテ百十三人、其内怪我人二十七人程釣台或ハ薙モツコニ乗セ人足ノ者昇来リ、屋飯ノ仕度致スベクト申シ、怪我人十八九龍園山福善寺へ組頭藤兵衛案内ニ昇来リ、其節住職ハ師匠ノ葬式ニ付房州那古寺へ参リ留守ニテ院代定量一人ニテ住職留守ノ事段相断リ候へ共人足無断ニ昇込ミ、無拠年番役所ニ参リ、右ノ段相断リ候内、天狗派運勢轡數十流馬印ヲ押立テ守鳴ノ前富谷村へ押来ル。其注進櫛ノ齒ヲ挽ガ如シ。敗兵勢屋飯ノ仕度間ニ不合内早押来ル。其時諸誠派ノ者数田町入口高札ノ処ニテ此アリ屈意ノ場所ナリ、三兵ニ備ヲ立テヨトイフ。大将市川三左衛門ココニテ戦争

ヲ始メナバ市内迷惑大方ナラズ。依之家ヲ離レテ備ヲ立ツベシト下知ス。コレヨリ田町ヨリ山坊へ立越、此処ニテハ場所悪シト谷ヲ越エ、小字御館台へ上リ、夫ヨリ福岡台へ越シ、傍ナル朱玉山見徳寺一廊席松山村西宝寺トイフ、潰シ寺跡又小藪ニ陣ヲ取ル。其内五人松山街道ヲ落行キ、右ハ凹堂左米倉山西光寺ノ末松山村龍性院トイフ山ノ中ニ忍ビ入り、追来ル天狗派勢ヲ待掛ケタリ。

追手ノ人数彼福善寺へ追来リ探索致シ候処へ院代帰リ来リ、最前断リ候故私寺ニテハ一人モ居ラズト答フ。是非隠シ置ニ相違ナシト船橋定吉進人、此処彼処ト尋ネ出ス処、寝所床ノ間文晁ノ掛物県ケタル脇ヨリ大岡畑眠ト云フ者一人右ノ腕怪我致シ左ノ手ニ大太刀持チ躍リ出シ、船橋定吉ガ隠ヲ左右ヨリ切付ケ、二人目ノ天狗ハ眉間ヲ切付ケ、ヒルム所ヲ其間ニ後ノ山へ駆登リ何処トモ無ク逃去リニケリ。追手大勢入来リ、兄船橋大助、弟ノ隠ヲ切ラレタルヲ残念ニ思ヒケン、小屋ヲ始メ厨ノ方へ火ヲ掛ケレバ、忽チ黒烟リ天ヲ焦シ、玄関広間寝所迄不残失セ、廊下ヨリ既ニ本堂へ燃エ付カント致ス時、少シ北風吹ケルガ忽チ風ハ南ニ吹キ返スト雖、火掛致候者ハ切殺スト大刀ヲ抜キ鑓押取り付ク事能ハズ。然ル処ニ一人来リ、悪人ノ中ニモ善人有リ、セメテ本堂斗リモ助ケ遣ハセト下知ニ依テ俄ニ火掛致シ火ヲ鎮メ、寺男ニ云付ケ、定ル大切ノ品モ可有、其方ニ遣ハス間持出スベシト下知ニ依ッテ、夫ヨリ法流並ニ過去帳其外什物我荷出ス。是正シク秩父妙見宮並ニ仏菩薩ノ御徳ニヤ。市中ハ今ニ焼キ捨ニ相成ルカト老若男女歎

キ悲シミ騒動大方ナラズ。引統テ天狗勢松山ノ一方へ追駆タリ。先陣大将尼子扇之助安造清兵衛真先ニ年令二十一位、美姉一人長刀携へ、先進タル小田堅源共進マセナガラ采配振切程振立テ進メ進メト下知スル所ヲ、最前龍性院ノ山中ニカクレイタル五人ノ内十四、五オノ童子残切天窓ニ豆絞リ鉢巻致シタルガ礼ニ折々出ス鉄炮ニテ胸板抜カレ馬ヨリ真逆様ニ落チ即死セリ。引統キ木村幸太郎腰ノツカへ打抜カレ其場ニ死シタリケリ。スハ戦ハ爰ト松山街道大松庚申塚ヲ本陣ニ備ヲ立テ、金ノ玉ニ左ニ四ツ目ノ吹流シ四方ニ垂レタル馬印鑓至誠貫天地大至誠斗リ奮キタリモノアリ。銃ノ字ノ旗外數十流押立テ双方炮戦相始リ、頃ハ四ツ半時ニ打出ス大筒鉄炮小筒其ノ響天地モ崩ルム斗リ也。語誠派方十人斗リ、先陣尼子勢ノ群タル中へ切込ミケレバ馬印ヲ拾置キ大勢トント逃出ス。其ノ時金ノ玉丸ニ四ツ目ノ馬へ手ヲ掛クレ共生木へ縛付タレバ不能取事。其時ニ陣ノ大将武田万之助、山田長十郎、伊藤源太郎、長風某、沼又藤左門、渡辺定吉、三陣川井房之助、井上源治郎、方波見隅五郎、小笠虫蔵、石川八百蔵、宮本權太郎、滝束組、籠組、矢羽組ノ馬印、惣勢千余人ドット追駆来リ、四方四ヒラノ花ノ吹流馬印鑓數十流大炮ニ挺持チ来ル。其時十人斗リハ元西宝寺ノ本陣へ引取り、段々ニ引キ側ナル忠左衛門屋敷遣切起シ、木ノ根積置キタルヲ台附シ打出ス鉄炮ニ中リ、追手方ニ怪我人多シ、又段々引取り松山村中台村界へ引キ備ヲ立テ打出ス鉄炮ヲ、凌兼寺ハ疊ヲ人足ニ云付ケ取寄セ備ヲ致ス。然ル処松山村人足案内シテ彼

龍性院ノ清左衛門前ヨリ間道ヲ通り、諸誠方ノ備ノ後ヨリ大炮へ推  
ノ寒玉沢山籠メ打出ス筒先ニ中リ五人程一度ニ相果テタリ。依ッ  
テ弥々大崩レニ相成リ、敗兵者怪我人十人斗リ踏止リ、怪我人ハ  
落行ベシト云フ。其時一同此処ニテ討死致スベシト云へバ、死ハ  
一旦ニハ安シ、一先ツ落行キ、時節ヲ可待ト無理ニ落シ、怪我人  
十八人斗リ踏止リ後殿致シ、其時市川一人小松山ノ中ヨリ名乗り  
出デ、大太刀ヲ真向ニ振上ゲ切ッテ出ル。其物懐サ、又獅子奮迅  
ノ怒ヲナシ、古へ烏江ノ大合戦ノ項羽ノ再来カト皆恐怖ノ色ヲ顯  
ハシ、或ハ鎧ノ柄ヲ切折ラレ、或ハ鎧ノコミノ所ヲ切りヌカレ、  
又々天狗勢敗走ス。其時何処へカ落行ク外六人モ落行キ、四人踏  
止リ血戦ス。早落行ク敗兵富岡村ヲ指シテ行キ、右四人モ落行キ、  
死スル者有リ、天狗勢追々跡駈ケ中台村三右三方ニ行キ尋ネケレ  
バ、一人水風呂桶ヲ冠リ隠シ居タリ。右者生捕ニ相成リ、夫ヨリ  
富岡村へ追駈ケル所名主喜右衛門戸ヲメ置キケレバ、定メテ敗兵  
隠シ居ルナラン。焼捨ベシト云フ。喜衛門申サレ候ニハ決シテカ  
クマイ申サズ。開キ見スベシト戸ヲ明ケドモ一人モ居ラズ、各々  
方へ兵糧ノ仕度仕リ候間差上グ可トムスビヲ出ス。然ラバト手ニ  
手ニ取食ヒ、敗兵ハ何処へ逃去リシヤト尋ヌ。喜右衛門答へ、上  
総芝山ヲ聞キ彼方へ落行キ候。其時向フノ方見渡ス所米倉村地内  
ニ茂リタル山間、彼方ニ如何ト云フ。彼方へモ行キ候ト答フ。然  
ラバト皆々米倉村指シテ尋ネ行ク。此ノ間道程余隔リ、此時道程  
半町違ヒ直グ追駈ケナバ又々戦争ニ可及之処米倉村ニ行ケル間富

岡村ノ仕合セナリ。敗兵ハ富岡村ヲ越エ飯倉村字飯ノ森ト云フ処  
ニテ十三人行キタラレ死ケレバ、仲間ノ人首ハ刎ネ持テ行キ、死體  
斗リ残りケリ。天狗派米倉村ヨリ新村貝塚村ノ方へ来掛ル時既ニ  
日モ西山ニ傾キケレバ右岡村へ泊リ相成リ、合戦致候者ハ八日市  
場へ帰陣仕リ、合戦ノ間ニ不合者泊ル。敗兵ハ笹本村ニテ人数相  
改メ候処五十三人ニ相成リニケリ。

其ノ日ノ七ツ時過、上総芝山へ行ク乞食一人抑へ探索致シ候所  
彼ノ乞食口不調法ニテ逃出シケレバ、大勢押取巻キ切殺シ候。内

六日合戦ニテ諸誠派方死人

首級不分明

朝比奈弥太郎  
朝比奈 弼 負  
富 田 理 助  
引 隆 三 郎  
佐 藤 酉 之 助  
佐 藤 亥 三 郎  
生 井 松 次 郎  
生 井 弟 某  
丹 下 音 藏  
大 久 保 貞 藏  
大 高 弥 兵 衛  
山 田 惣 次 郎

大 山 宗 七  
友 野 德 之 助

都合十三人、外九人姓名不明

生捕老人

松平右京亮談合降伏為致候事

八十八人、外旧幕 従一人

其場ニテ天狗派討死 四人

下宿ニテ死去 一人

深手 九人

浅手 四人

証談方其外一人二人ヅツ所々へ落行ク。一組八人ハ上総横芝村ヲ聞キ落行キ候者之候。

六日合戦仕舞ヒ、首級二十三、髪ヲ縛シ、竹へ引掛ケ持帰ル。

又即死怪我人ハ戸板ニ乗セ年番役所へ昇込ミ、奥座敷迄血流シ目モ当テラレヌ有様ナリ。六日夜本陣桐屋治兵衛宅ニテ尼子武田ノ運勢泊リニ相成リ。人数其夜処々ニテカガリヲ焚キ、村人足ノ大勢立番致ス時、夜ノ五ツ時、新宿山ノ方ニテ鯨波ノ声激シク聞エケレバ二階ノ者聞キ付ケ、スハ敵軍寄せ来ルト俄ニ大騒動ニ相成リ、陣太鼓ヲ打チ、貝吹立テ候ニ段々近ク富谷村籠部田村堺位ノ所ニテ鯨波ノ声聞ケバ大炮ヲ二度打ツ。物見ノ者馬ニテ駈出シ能ク見レバ、大勢ノ人足東谷村ト提灯ニテ、太田村ヨリ継立ノ兵糧

ヲ持来ルナリ。其節実非不明内宿ノ者ハ色真青ニナリ、ガタガタ震エナガラ一言モ発セズ、唯茫然トシテ居ル斗リ。市中ノ其時女小供ノ啼ク声聞ケバ誠ニ哀ナリケル次第ナリ。

翌七日村役人共人足差支ノ咎メ縛上候者

名前 名主 小横治

名主 助右衛門

興頭 藤兵(衛)門

名主 清右(衛)門

福善寺 院代

寺男 半兵衛

歎願人 十兵衛

中川屋半七

右ノ者ヲ縛上候ニ付村中大混雑致シ、近村役人頼ミ致スト雖更ニ開入レ無之、扱無ク献金ノ儀ヲ願候。誠ニ傍若無人ノ振舞ナリ。弥々銘々ニ首刎ヌベシトテ荒縄ニテ縛替エ引出ス。其時大目附中村忠右衛門へノ見舞トシテ金五十兩、外ニ金子五百兩差上ゲ、漸ク一同赦免ニ相成リ候事、其外夜分ニ押入り簞笥ヲハタヤ、又途中ニテ娘子ヲ捕ハ強姦致シ、戸ヲメ置ク処ニ無理ニ押入り、刀ヲ抜キ、我ニ随フ哉否ヤト、誠ニ阿鼻地獄ノ世界ニテ實ニ逢フニ同然ナリト思ヒケリ、又外ニテ右ノ通り我ニ随フ哉ト云フ。是ハ美女ナルガ私事ハ只今経行真最中ト言訳スレ共更ニ開入レ無之、夫ニテ不構ト云フ。女又日夕、私久敷瘡毒ヲ煩ヒ身体自由ナラスト

イフ。若シ胡乱ト思ハバ裸ニナリ見スベント云ヘバ放シケリ、之ニ依リ虎口ヲ逃レタリト云フ。其節ハ毒藥モアレバ呑ミ即時ニ死ニタキ思ト斷セリ。又明暮市中ヲ巡リ、雞ヲ切殺シ又ハ突殺シ持テ行キ、段々近在迄雞ヲ取リニ行ク事數多シ、又犬ハ途中ニテ切殺シ、既ニ修羅道ノ阡陌ト哉思ハレケリ。又小供等ノ囃子ニ「大坂天満ノ真中デ傘枕デ……」ト云フ様ニ、本町札ノ辻ノ前ニテ夕暮時使ニ出デタル娘ヲトラヘ強淫致シタル風聞有リト。市中ノ店ニハ押借り又ハユスリ致候故商人ハ戸ヲメメ、通行ノ者モ無之様ニ相成リ、女中衆ハ隠レ居テ不出。此体ニテハ村潰レ候様子ナリ。誠ニ桀村ノ世ニ住メル心地シテ民塗炭ノ苦トハ此事ナルベシト歎カヌ者コソナカリケリ。又日數十日斗リ、同十日水戸殿後勢多古村迄縁込ミ來ル。大将分三木三太夫ヲ始メ雨之宮淺倉等凡ソ人足迄三四百人余、敵重ニテ其後立番所出來、無提灯ニテ廻ル。尤モ御陣屋ヨリモ御見廻出役有リ。然ル所翌十一日朝五ツ半頃多古様村戸出ニテ曲者一人召捕リ、問屋真次郎宅ヘ連レ吟味ノ処ヘ水戸殿家來八九人來リ、一同ニテ吟味致シ候処、彼ノ者申スニハ、江戸谷中因子坂村生レニテ煙草屋ノゼンマイ直シ職人杯ト取り留無キ事斗リ申ス。然ル処ヘ御本陣ヨリ重役ノ方出役致シ、座敷ヘ上リ、叮嚀ノ挨拶ニテ相尋ネ候処、彼ノ者慙慙ニ礼ヲ為シ、是ヨリ真実ノ義申上ル。元水戸殿家來関八太郎ト申ス者ニ候。当九月十九日、奥ヨリ水戸弘道館迄押寄セ來リ、館乗取候由申上ル。然ルニ敵ノ大軍八方ヨリ押取巻ギ、依ツテ血戦シ其場ヲ逃レ去リ、銚

子表ヨリ八日市場ヘ参リ合戦ノ半故其場ヘ出頭。尤モ某筈病ニテ難波仕リ傘屋何某ト申ス者ノ宅ヘ駈込ミ隠レ居リ候。最早敵モ引退キ候ハント十日夜出立致シ、途中道ニ迷ヒ、今朝此ノ処ヘ來リ斯ノ次第ト一々申上ル。是ヨリ問屋引立テ三木三太夫ノ本陣ヘ連行シ參ル。大将モ叮嚀ノ挨拶ニテ相尋ネ、其後火鉢御茶ヲ差出ス。懐中改メ候処毛氈ノ下着、短刀、兵糧袋、干飯少々有之、弟ノ戒名ヲ所持致居候。

水戸殿元家來 兄 関八太郎

辰 廿三才

慶応四年五月六日 俗名

清淨院釈番照天居士 弟 中山信之助

奥洲ニテ討死 辰 廿一才

武士ハ疊ノ上ニ生レ、田ノ畔ニ死スヲ本意トカヤ。比関氏不運ニテ繩目ニ及ビ、水戸表ヘ差送ラレ、如何ナル仕置カ、存命ノ程覚束ナン。嗚呼痛敷哉、悲シイ哉。

完

大正八年八月二十六日書写

田町 大川すみ江

奸賊討取討死控中日記  
及び討取連名附地図

日記帳

吉田村	九月二十五日七ツ時吉田村薬玉院人数三百人余人操出し大足村休足致し二六日朝明六ツ時笠間 <small>に付止宿致し</small>	太田村	見上り夫より下総国見田村夜飯致し夫より太田村に付泊相成夫より夜るひる道中致六日朝五ツ時出立仕候八日
大足村	二七日二八日迄休足致二八日夕七ツ時笠間操出し小黄	八日市場	市場宿敵に追付候其宿寺に而軍に相成其寺に而首二ツ
笠間村	村泊り二九日朝五ツ時小黄村出立致し茂木城下に付其	中台村	討取夫より中台村に至り大戦に相成松山に於て顔首二
小黄村	夜茂木泊りに相成候十月朔日茂木城下朝五ツ時出立間	八日市場	十六打取仕夫より御陣廻様に隨而八日市場に引休足致
茂木村	村休足致し夫より塩子村に付泊りに成候二日朝五ツ時	三川村	し六日七日八日九日迄休足致し十日朝五ツ時八日市場
塩子村	塩子村百姓御加勢人数三十余人御共仕候夫より上古内	三川子	操出し三川村休足致し夫より出立致し銚子宝萬寺操込
古内村	村休足致し夫より谷中挂岸寺操込み早速顔首十二取夫	本城村	致し一夜泊り相成十一日朝五ツ時本城村三嶋屋弥兵衛
谷中	休足致し其夜四ツ時南町迄操出し御かため致し夫より	佐原	宅に止宿致十一日十二日迄休足致十三日朝五ツ時佐原
南町	だんだん泉町迄相引候泉町に而首一ツ打取夫より桂岸	横宿	に操込候横宿町江戸屋に泊りに相成十二日十三日迄休
泉町	寺迄引休足致し三日朝五ツ時操出し長岡村迄休足致長	牛堀村	足致十四日朝五ツ時操出し舟にのり牛堀村に付泊りに
長岡村	岡村九ツ時操出し紅葉村に付夜飯致し夜通し玉造村迄	玉造村	成夫より十五日朝五ツ時牛堀村立出玉造迄休足致し夫
紅葉村	付泊りに相成四日朝玉造出立致し玉浜に而舟にのり舟	紅葉村	より紅葉に付泊りに相成候十六日朝五ツ時操出し長岡
玉造村	道中牛堀村に而舟に而休足致し夫より舟倉致し野尻に	水戸	村に付休足致夫より長岡操出し下町一丁目御会所操込
野尻村			操込仕候免目不空御座候



下総国匝瑳郡八日市場松山村  
中台二於て討取

朝比奈弥太郎  
朝比奈靱負  
佐藤主税  
佐藤酉之介  
富田理介  
生井松二郎  
丹下音藏  
大久保貞藏  
大高弥兵衛  
山田惣二郎  
友部徳之助  
孫引隆三郎  
青正清七  
生井某

外に首級之  
十人内  
吉三郎

焼失首級三

討捨七人

ノ百六十四人

以下略

安藏  
清兵衛  
鈴木欣一郎  
佐藤留男



水戸藩志士弔魂碑

(朝比奈知泉文集所載)

松山、中台兩村。徳川氏時屬幕府直轄。旗下之士中根定之助率之。明治維新。設府藩臬制。幕領置府臬。兩村合為宮谷臬。柴山文平任臬令。里正之稱。名主改組長。大木三右衛門任中台組長。下山九兵衛任松山組長。佐助翁即三右衛門嗣子也。是時與羽未平定水戸藩党爭餘燼猶熾。朝比奈泰尙。其嗣子泰彙。寛政布。其子政常。及市川弘美等率諸生党。元年三月發水戸。与佐幕諸藩兵戰。越後会津。九月歸水戸。欲頼貞芳大夫人訴情。不果。挾城門外弘道館。健闘乱擊遂敗退。時十月一日也。泰尙率殘卒。由銚子出手八日市場。六日朝向中台。天狗党進多古街道至松山台。兩軍接戰。互交砲火自巳至午。一恃衆。專頼火器。一決死。須臾且憊竭。大呼求短兵迫鬪。不応。飛丸如雨諸生党軍遂全滅矣。遺屍二十有五。其一無首級。戰熄後。柴山臬令命兩村吏民。遍搜索。傾溷用水漿。而終不獲云。大木。下山。兩組長及中台村長山崎八郎兵衛中台仁右衛門。松山村長古閑佐兵衛。関忠兵衛等相謀。収戰歿二十五人遺骸葬之。建碑祀焉。歲時香火不絶。以後至今日。大正十四年四月予与家兄及び弟金三郎。始至戰蹟大木佐助翁導予等兄弟。指点邱園。詳説当年状景。由其戰袍知為宗家父子。其無首者蓋寛政布

以其死分明。其首級不傳致于水戸也。頃者兩村有志相謀建弔魂碑求予記之。予不敏何以當之。願予亦朝氏一塊肉也。生父与伯叔父從兄皆黨國難。今頼翁審一門奮闘宗家陣歿之迹。自非翁年餘古稀。曷強記安能至此予不得以不文肯辭也。戰歿二十五人氏名錄於左。

- 朝比奈弥太郎泰尙 同叔負泰彙 寛助太夫政布 佐藤主
- 税 佐藤貞之助 富田理介 生井松次郎 橋本小三郎
- 丹下齋蔵 (音ノ誤植カ) 大久保貞蔵 大高孫兵衛 山田惣次郎 友部
- 徳之介 綿引隆三郎 春山崇七 鈴木欽一郎 佐藤留男
- 大嶺総七郎 河合子之吉 上彦四郎 小山金平 (外從者四人)

大正十五年四月

朝比奈知泉選文

(大15・11・9 いはらき)

註 千葉県八日市場市松山の「脱走塚」には戦死二十五人墓と彫んだ墓碑と弔魂碑が建てられてあるが、弔魂碑の碑文は右と同じく朝比奈知泉の選であるが、文章は右よりもかなり簡單化されたもので、戦死者名は、墓碑寄附者名と共に碑陰に彫ってある。又日附は大正十五年十一月十日である。名越

## 松山戦争

明治元年戊辰三月水戸藩士にして佐幕の主義を体するの徒相率て国を脱し会津及越後に入り徳川氏の脱士及奥越藩士と相合して各地に鬆散官軍に抗し常に利あらず九月に至り会津城陥り殘徒四方に離散す茲に於て水戸藩士の志を得ざるの徒相率ひて帰來し城に入らんとす城兵拒て容れず九月二十九日より十月一日に至るまで水戸城廓争奪の戦あり是より水戸藩士兩派に分れ水戸派を正義派又は天狗派と稱し反対派を純真隊又は書生派と稱するに至れり

十月三日書生派の首領市川三左衛門朝比奈弥太郎等徒党九十餘人を率い遁れて下総國銚子に至り飯岡を経て八日市場に向ふ天狗派は尼子仙太郎を將とし藩兵三百餘を隨へ之を追撃す十月六日兩軍八日市場に相違ふ天狗派は先づ書生派の拠守せし福善寺を焼き払ふ書生派逐れて今の匝瑳村松山台に至り兩軍交戦半日して天狗派全く勝を得るに至れり世人之を松山戦争と稱し今尙戦死者二十五人の墓と題する一石碑の耕圃の中央に樹てるを見る。

此の戦争に於ける死者二十五人の姓名は今之を詳にするを得ずと雖も天狗派に於て其の首級を斬り取り持ち去りたるを以て書生

派中の人たることを疑なし近頃天狗派に属せし者の取り調べたる記録によれば右二十五人中には必ず左の人士の含まれ居ること疑なしと云ふ即ち朝比奈弥太郎、市川主計、生井秀三郎、宮田常之介、佐藤主税、富田理介、大久保貞蔵、佐藤留之助、綿川隆三郎、橋本小三郎、生井松次郎、鈴木欣一郎、朝比奈鞆負、友部徳之介の十四名にして他は不明なり、又書生派の記録の内より番抜きたるものを見るに左の如き人名あり是非参考と爲すに足る。

朝比奈弥太郎、同鞆負、富田理介、佐藤主税、佐藤留之助、生井松二郎、橋本小三郎、大久保貞蔵、友部徳之助、生井某（生井秀三郎ならん）綿川隆三郎、鈴木欣一郎（以上天狗派記録にあり）

大高弥兵衛、山田惣二郎、青山清七、小實理三郎、佐藤留男、外に吉三郎、安蔵、清兵衛の三人及氏名不詳の首級三個とあり而して天狗派記録中の市川主計、宮田常之介の氏名なきは或は氏名不詳の首級中の人なるに非るか又市川主計は市川三左衛門の息にして弘道館にて戦死せしものなりと云ふ者あり茲に記して疑を存す

書生派の首領市川三左衛門は松山を逃れ本郡東陽村の民家に隠れ

戦没者氏名校合表

後江戸に越き捕に就き再び水戸に押送磔刑に処せられたりと云ふ  
 天狗派の記録中に下総八日市場及松山の追撃戦に於て戦死せし人名を載す左の如し茨城郡常磐村の人川反友吉(十八才)久慈郡大和田村の人早川兵吉(二十四才)久慈郡磯部村の人和田喜兵衛

(三十一才)新治郡川中村の人齋藤博蔵(四十七才)是なり或は二十五人戦死の墓には是等の死体とも包含せるにあらざるか。  
 大正十年十月五日千葉県匝瑳郡教育会発行「匝瑳郡誌」戦乱篇より

<p>(碑裏)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○朝比奈弥太郎奉向</li> <li>○朝比奈靱負奉乗</li> <li>○寛助太夫政布</li> <li>○佐藤主税</li> <li>佐藤貞之助</li> <li>富田理助</li> <li>生井松次郎</li> <li>×橋本小三郎</li> <li>×丹下音蔵</li> <li>○大久保貞蔵</li> <li>大高孫兵衛</li> <li>山田惣次郎</li> </ul>	<p>(水戸藩国難事件 殉難者名簿)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○(家老)朝比奈弥太郎</li> <li>○(小姓頭)朝比奈靱負</li> <li>○(家老)寛助太夫</li> <li>○(同心頭)佐藤主税</li> <li>佐藤貞之介</li> <li>(町奉行)富田理助</li> <li>生井松次郎</li> <li>(水戸ニテ戦死中間頭列)橋本小三郎</li> <li>(普代同心)丹下乙吉</li> </ul>	<p>(奸賊討取並ニ討死扣)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○朝比奈弥太郎</li> <li>○朝比奈靱負</li> <li>○佐藤主税</li> <li>○佐藤西之介</li> <li>富田理介</li> <li>生井松二郎</li> <li>(橋本小三郎事)×丹下音蔵</li> <li>○大久保貞蔵</li> <li>大高弥兵衛</li> <li>山田惣二郎</li> </ul>	<p>(匝瑳郡誌)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○朝比奈弥太郎</li> <li>○朝比奈靱負</li> <li>○佐藤主税</li> <li>佐藤留之助</li> <li>富田理介</li> <li>生井松次郎</li> <li>×橋本小三郎</li> <li>○大久保貞蔵</li> <li>大高弥兵衛</li> <li>山田惣二郎</li> <li>友部徳之介</li> <li>綿川隆三郎</li> </ul>	<p>(見徳寺過去帳)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○朝比奈弥太郎</li> <li>○同 靱負</li> <li>佐藤西之助</li> <li>富田理助</li> <li>生井松治郎</li> <li>×丹下音吉</li> <li>○大久保貞蔵</li> <li>大高弥兵衛</li> <li>山田惣治郎</li> <li>友部徳之助</li> <li>(ハタ)引隆三郎</li> </ul>
--	--	---	--	--

<p>(碑 裏)</p>	<p>(水戸藩國難事件 殉難者名簿)</p>	<p>(奸賊討取並ニ討死扣)</p>	<p>(匝 瑳 郡 誌)</p>	<p>(見徳寺過去帳)</p>
<p>○友部徳之助 ○綿引隆三郎 ×春山宗七 鈴木欽一郎 ○佐藤留男 大嶺総七郎 ○河合子之吉 ×上彦四郎 小山金平 ×小貫理三郎</p>	<p>(徒士) ○大久保貞蔵 大高弥兵衛 山田惣次郎 (徒目付) ○友部徳之介 (水戸ニテ戦死、徒士) 綿引隆三郎 ×春山宗七 (大番頭) 鈴木欽一郎 ○佐藤留男 (小十人目付) 大嶺惣七郎 ○河合子之吉 (徒士目付) ×上彦四郎 小山金平 ×小貫理三郎 小貫理三郎従者 越後ニテ 戦死 安蔵 吉三郎 清兵衛</p>	<p>○友部徳之介 孫引隆三郎 ×青山清七 鈴木欣一郎 ○佐藤留男</p>	<p>×青山清七 鈴木欣一郎 ○佐藤留男 ×小貫理三郎 ×吉三郎 ×安蔵 ×清兵衛</p>	<p>佐藤亥之三郎 大峯宗七郎 生井松治郎弟某 外九人姓名不知 同二人焼死姓名不知 (二十五名)</p>

校 合 表 に つ い て

<p>齋藤新一郎盛至 益子民部左エ門 益子寛 (二十八名)</p>	<p>(大番組) 齋藤新六郎 (郷土) 益子民部左エ門 (郷土) 益子寛介 (留付列) 和田銀平 寛平十郎 大嶺小太郎 (二十六名)</p>	<p>生井某 他ニ焼失首級三 討捨七人 (二十九名)</p>	<p>(齋藤伝蔵) (和田喜兵衛) 生井秀三郎 市川主計 官田常之介 首級三個 (川又友吉) (早川兵吉) (二十五名)</p>
---	--	--	--

表中の氏名の上の○印は、水戸彰考館所蔵の「水府系纂」中に記載されていることを確かめ得た氏名であり、×印は同書中に記載を認められない氏名であるとの謂である。他のものについては調査する暇のなかつたことが残念である。他日全氏名につき、又天々の記事内容を検討して、更に調査を進めることを念願するものである。

さて、上段の碑裏に刻まれた氏名については、碑の建立された大正十五年十一月当時は二十五人の氏名だけで、齋藤新一郎盛至以下三名は後日になって追加されたのではないかと思われるがど

うであらうか。

第二段の氏名は、「水戸藩国難事件殉難者名簿(水戸殉難志士恩光碑保存会により昭和九年に発行された小型の名簿)の中に五十音順に配列されたものの中から「八日市場ニテ戦死」とあるものを、上段の氏名に合わせて列記したものである。これには役職の記載されたものがあるので、参考にもと付記しておいた。

第三段、「奸賊討取ニ討死扣」は、大中氏の水戸市に在る御縁戚にて新たに発見された資料の一つで、明治元年辰極月廿日の日付があり、追う方の立場の一人が書きとめたものである。

その中で注目すべきことは、橋本小三郎事、丹下音蔵との記載であるが、碑裏にはそれぞれ別の個人として扱われ、殉難者名簿にも別人として、然も橋本は「水戸ニテ戦死」とあって場所も異り、役職も違っている点など如何であろうか。匝瑳郡誌には橋本の名を挙げて丹下は無く、見徳寺過去帳には丹下の名が見えて橋本の名は載っていないのも、やはりこの二名が同一人物ではないかと思わせる何かがありそうである。いづれにしても、水府系纂中にどちらの名も見出し得ないというのは、軽輩だった故かもしれない。

第四段は匝瑳郡誌中の松山戦争の記事に見られる氏名であるが、どんな資料に依ったものか知る由もないのが遺憾である。

第五段、見徳寺過去帳は、事件直後の記入ではなく、明治十年

頃の筆らしいが……と聞かされたがどんなものだろう。

次に表中に見られる佐藤姓の三名について述べて見たい。水府系纂所載の系図によれば、酉之助の名が見えて貞之助（介）も留之助も無く、父信近図書之二男に当り、留男はその四男の名である。見徳寺過去帳にある亥之三郎との記名は如何なものだろうか。又主税の称については信近から数代溯って、何代かにわたって同じ主税の名を称しているのを見るのであるが、ここに関係のある主税の本人は、実は系図中に図書を称している信近のことではあるまいか。

以上五資料に基く氏名の校何表について述べて来たが、何分にも百年を経ようとする今日、その確否を判定することが如何に困難であるかを知らされるのみである。

## さぶさのおちば

大 川 堤 一

### (一) 何故八日市場を撰んだか？

明治元年十月六日、松山中台で水戸浪士二十五日の首級なき屍を葬った。これが脱走塚と呼ばれ今日に至った。

一日の戦斗で終った此の事と片貝騒動とが、三百年間天

領である為、勅皇にも開国にも事無く送って来た地方人にとって、唯一の明治維新の余波であった。

諸生派の市川、朝比奈等は、何故に八日市場に來り、福善寺を志向して陣としたか？又松山、富岡、飯倉、栗山川を渡って芝山



村まで行ったか？ 此等が長い間疑問であった。今回脱走塚百年祭に際して、文献に、口碑に之れを尋ねたが、解決とまでは到らなかつたが、其の内の二三を抄録した。

水戸と匝差諸邑は深いつながりがあったのではないだろうか。常陸と下総、大利根をはさんで隣国である。利根川は交通路として共に利用し、接触の度合も繁かつたろうか匝差諸邑は、江戸への通路は、交易路として此の川にたよつた。八日市場も小見川から江戸へ、江戸から小見川へと利根を利用した。私の家でもこの為めに小見川に親類もあり、鉄道が敷設されるまでは往復があつた。又常陸の鹿嶋神宮と香取宮との関係。こう述べて見ると、交通流通は非常に旧いかもしれない。匝差の老尾社は式内小社であるが、兩社とは縁が深いのである。

又水戸義公は、生母お万の方の墓を詣るため元祿八年一月廿日飯高榎林に來ている。其の帰路を見ると、大体脱走隊の進路と等しい。飯高―大寺―飯塚―椿―大田（一泊）―蛇園―塙―芝崎―垣根―飯沼―四日市―野尻（一泊）―水路塩崎―（以下略）

小見川は徳川中期から八日市場へ通ずる様になつたのかも知れぬ。中川が出來てから江戸への通路となつても、水戸からは、此の辺が道として生きていたのかも知れない。匝差への記憶は、藩祖の生母の墓所としてか？道路としてか？又兩社と関係深い老尾神社の社僧寺としての福善寺を知っていたか？これ等が時間的に無理だとしたら近い所を捜そう。

(1)

熱田玄庵、共興地区長谷の人。鷲見道賢に学び、後南紀の名医華岡隨軒に就き、帰郷して医業を開く。是れ関東に於ける華岡流外科の嚆矢であつた。治を乞うもの常総三州の諸侯より遠く信州幸田家に及び、水戸侯高祿を以て待医に迎へんとしたが辞して仕えず、出入医となり、奥医師と対等の待遇を受けた。氏は別に勤皇の志厚く、其の交わる所、く当代勤皇の名士であつた。殊に戸田銀次郎、藤田誠之進、宮本茶村等と深交相往來し、私かに時運を待つたが、弘化五年正月廿二日没。享年四十二才。宮本水鑿墓誌を選び、藤田彪が雄筆を揮つた。又其の家の襖に藤田、宮本等の書が多かつた。此の人を介して、水滸と匝差との交流が考えられる。そして水戸の志士達のみならず上士富商との交流も考へられる。大國隆正は、八日市場に少くとも二、三カ月は滞在していると古老は語つた。今は珍しくなつたが、隆正の歌輻額等は甚だ多かつた。

大東亜戦争当時、時運に乗じて彼の書は東京に出てしまつたが、私の少年時代、好事の家には皆あつたと云つてもよい程であつた。今尋ねると、戦争中防空壕に入れてボロボロになつて了つたといふのが多い。此の隆正は、田町の深田清の家、籠部田の布施家などに居た。深田清は勤皇の志篤く、片貝騷動の折、作田川で戦死した。深田家の墓所は福善寺である。

深田清の叔母とはは水滸の家老の家に見習奉公に上り、小太刀

と柔のたしたみがあった。後年賊に侵入された時、忽ち之れを捕りおさえたと言ふ。その家老の名は、今にして解する術はないが一応熱田玄庵、隆正あたりが考えられる。現在万町の直本康人氏は、とはの孫であるが、何故とはが水藩迄奉公に行ったか、何人の家に行ったかは父に聞かずに了ったと云っている。

(四)

片貝騒動は、水藩との連係に於て準兵すべく準備中、幕府の命に依り、両総藩の攻撃に依って鎮圧されて了った。

片貝騒動の主謀者の楠音次郎は、楠氏の子孫であると信じ、勤皇の志を感していた。藤田小四郎の脱藩して広く同志を糾合していた時、藤井竜之は、藤田と同志の糾合に協力した生存者であったが、その懐田談に「向上総茂原の楠音次郎、千葉源次郎や上州赤城山で事を挙げようとした武州中瀬の桃井儀八連中も加り……」とある。

此の事件は、文久四年正月十七日から、事了つたのは四月であった。自刃せるもの七人斬首せられしもの十一人、戦死せるもの数人、その中に深田清がいた。

深田家の系図によると、六代深田忠右衛門、重良四男、天保十四年生れ、幼名由三郎、又清八と称す。尊王攘夷討幕を企て、多数の浪士を糾合し真忠組と称す。文久四年正月十七日南総小関村に於て幕軍の爲めに戦死す。時に年二十二、法名清修院深義海港信士。

茂原の東光寺と対して八日市場の福善寺を支隊屯所とし、山内頼太郎隊長となり、深田清等は之れを援けた。正月十七日、本部片貝屯本隆寺等を攻撃され、深田等は之れを救わんとして作田川岸に接戦、戦死した。千葉源治郎、深田は八日市場の人、大木八郎は須賀村蕪里の人、郡内に関係せるものは多く、連類千人余は追捕をまぬがれたのである。此の中にいた人が後に水藩の武士達に従っていたのではないか？

(五)

明治元年十月六日の朝、大田から八日市場への道筋道に早稲田刈りをしていた百姓に、八日市場の福善寺へはどう行くか？と道を尋ねた一団の武士達があつた。又少時して武具跋しい多数の武士達が同じ様な聞き方をして追つて行つた。

又市川三左衛門が中台に敗れて、富岡から西香屋の大木左内をたよつて、六日夕方、屋敷裏から「左内はいるか？」とはいって行つたと云う事を聞くと、西人は既に交友があり、一度ならず来ているか、さなくば、可成り精しい地図を与えられていたとしか考えられない。当時の事情で、世を忍ぶ者が、人にも聞かず目的地に直行出来る筈もないし、左内も、此の深手を負つた此の敗北者を、当然の事として迎えている点である。

富田理介は、飛田半七にその長男銀之助を養子として托した。飛田は命をかけて之れを伴い所々に潜行し、時運を待つ為逃避している。朝敵となつた人の子を如斯擁護出来ない。銀之助は長し

て、飛田は自家の家人だった、と云っている。どうして飛田は富田家に仕えたか。何か其処に連撃があったのではないかとはいは場合と同じく。

又水戸浪士と称する剣客が、匝瑳の地に二人道場を開いていた。その内の一人に左内は師事したのである。幕末の不安が田舎の若い人々を剣を学ぶことになり立てたのであろう。一人は野手にいた。此の人に從って武田耕雲齋に追従し、維新に乗じた兄弟もあつた。此の兄弟は片貝騒動にも加盟していた。剣の道からの接近も考えられる。

本市仲町の故塚本直清は、明治十三年ではあるが、常州潮来の住、日置流雪荷派十一代大塚嘉兵衛竹谷の門に入り、十六年指南免許を取り、十二代を継ぐ。明治年間ではあるが、常州との武道の交流の一端と見られる。

以上の外にも匝瑳諸邑と水戸藩とのつながりはあるかもしれないが、今私の手元には無い。只諸生派の人々が、利根川を渡り兩総に逃走する場合、銚子は高崎藩、小見川には内田、多古には久松の諸家が、僅少ながら錦旗を負っている為、守備の薄い元天領の大田、八日市場を退路としたと考えられるとしても、只それだけで八日市場福善寺という場所が撰ばれる必然性を欠くと思ふ。又銚子より給を儲うて水路東京に向うためとか、又は義軍村の乱の残党が君津、市原に多いので、それに合一すべく銚子に赴いたという説をなす者もあるが、これは幕士及び水藩以外の脱走士

の考えであつたと思ふ。諸生派の人々は既に死所を求めていたのではないだろうか？

(二) 市川三左衛門と大木左内

(1)

坐右秘録自明治戊辰至己巳 三(水藩石川義路の日記)

奸魁市川三左衛門始凡百人餘一昨六日下総椎名内北世と申処出立八日市場ニ而昼飯用意申付居候折柄役所並尼子扇之介一手都合八百餘騎ニ而同所へ押寄四方より取巻打合戦争ニ相成候所彼等追ニ松山村へ逃去候間無二無三ニ賣入朝比奈弥太郎父子始拾七人打取残徒追討として支配寺門熊太郎人数引率芝山村へ押寄夫より貝塚と申処ニ宿陣致居候趣尤味方尼子扇之介一手討死等五六輩有之由ニ候へ共市川三左衛門儀ハ松山村より脱逃之途中同人手ニ而鉄炮を以討留候趣其餘残徒松岸村ニ罷在候六十餘人儀松平右京亮方へ降参ニ相成候由ニ而下総筋戦争大勝利ニ付一ト先潮来御館へ人数引揚候趣支配出張先より只今注進申来候間不取敢此如御心得ニ申上候

十月

矢野 唯之允

市川三左衛門は中台に敗れ、山づたいに富岡に行き、更に飯倉よりイナゴ山の道祖神を祭れる藪に日没を待ち、西高野の大木左内宅を裏から訪ねた。左内は、右腕に深手を負つた彼を手当して屋後の物置にかくまったが、事件後なかなか深索の手が厳しいの

で、秘かに南の方の天狗山に小屋を造って匿し、釣りに行くようにして、魚籠の中に晒布、焼酒、鶏卵、食料などを入れて運んだ。

程経て、里人の目に焼酒、晒布等の買物の頻繁なことがうつるようになり、傷の癒ゆるを待って、二人は夜村を脱し、途中唐がらし売りに変装して、江戸を指して落ちて行った。

市川の宿で、夜中役人の見廻りがあり、二人は別々に宿を脱げ、一人は江戸へ、一人は西高野に帰って来たのである。

ところが、諸生派の頭目で最も勇猛に戦った市川が生存しているらしいと云うので、市川並びに陰匿者を密告した者に五円の懸賞金がかけられ、隣色の某が秘かに告げたので、左内は水戸赤沼の牢に収監され、訊問甚だ厳であった。彼が知らぬ、存せぬの一点張りなので、追求は拷問となり、三角木に坐らせ、脚の上に石を重ねて責めた。彼はそれに堪えた。更に裸の背に濡れ蓆をかけ、その上から鉛の熱湯をかけられた。それにも堪えた。そして明治初年、国事犯の無罪放免という果令芝山文平の布告によって彼は出獄した。

#### 市川三左衛門の最後

(田中光頭、水戸幕末風雲録)

八日市場で重囲を脱し、其の後江戸に來り、名を久我三左衛門と変え、娘の縁付ける芝三田魚藍坂なる宝徳寺に潜伏したるも、身の危険を感じ、更に青山百人町松平左兵衛督信筈の家臣、剣道師範島上源兵衛の宅に潜伏せる内、はしなくも、明治二年二月二

十六日、水戸に捕吏に発見せられ、水戸に護送されて斬罪に処せられ云々

(山本秋広著(木戸藩の世相))

市川で仙台で逮捕された水戸藩の諸生派の幹部、吉野英臣、高島平三郎らといっしょに水戸の上町の札場で生きさらしをされ、四月三日、市川は茨城郡長岡村(いま茨城町に編入)で逆磔(さかさはりつけ)にされた。中略

市川の逆はりつけでは、罪木にさかさに縛り付けて、頭をさべんに穴をあけて血をたらさせ、二日あまりも逆さのまま、生かしておいて自然と死ぬのを待ったともいわれている。後略

市川三左衛門は、死に臨んで一首を残した。

君ゆえにすつる命はおしまねど

忠が不忠と成ぞかなしき。

市川は文化十三年四月一日生れ、行年五十四才である。

左内の放免は、三左衛門の刑死後であろうと思う。出牢後、彼が如何に世に処したかは今にしては詳細を知るべくもない。彼の邸跡は畑となり、彼の家も長屋門も他家のものとなっている。其の建築を見ると、此の地方の百姓としては上の部である。彼は六人の子があり、そう中二人が女子で、長男虎治郎は二十二才で歿したので、末男円治に希望をつなぎ、後妻との融和をはかったが、円治は旅順の民政部の官舎にいて軍隊で柔道を教えて居り、なかなか父の意の如く内地には帰って来なかった。大正十一年八月二

十八日、後妻たみは八街町文違で死去した。其の後左内は銚子市にゆき、東高野の近類にも身を寄せたり、きわの母ときわと三人で寺の番などもした。旅順から、来るようにと言われても、此の母子と別れられず、不遇の中に歿した。大正十四年九月二十一日で、八十八才であった。明治元年には廿九才で元氣一杯であったのだ。此の妻の人、反骨漢の人生行路について、其の晩年を知る人は、「英雄の末路は……」と声を落すのである。横町の彼の塾「文武館」をいつ頃閉じたかも今は分明しない。其の庭にあって私の記憶にもある藤が、今中央小附属幼稚園の庭にあって、見事な花を咲かせている。その頃彼の所に被布を着た娘がいた。それが今の鈴木長次郎氏夫人の祖母である。

(四)

左内は後年よく語った。「自分は入牢中牢名主の扱ひを受けた。拷問は、氣を失うとやめて入牢休息させ、また後日行うのだ。自分は打たれても、三角木に坐り石を抱かせられて氣絶しても、夜中か、見廻りの来ない間脚をもみ、無理の来た腕や腰やをもみ、冷え込んだりしない様に温めた。出牢しても、灸治は絶えず行い、今尚無病で長命しているのだ。又戦争とは、講談や芝居の如くではない。自分は市川先生と一緒に転戦していたが、ある時屯している村で突然半鐘が鳴り、敵が来たというのと、「ソレッ」と敵味方が両方に一散に逃げた。その殺氣は非常なものであった。……」  
こういふ所を見ると、彼は、市川とある時は戦列を固しくしたと

ともあったらしい。この事がやはり左内が頼られたことにもなるうし、八日市場、福善寺が指向された事にもつながるのではなからうか。

私に彼が知ったのは、彼がときどき我が家に来たことと、亦姉が彼の妻たみの教え子であったことで、一週間程御手習草紙と彼の書いた手本とを持って、姉に連れられて通ったことである。横町の文武館という寺小屋風の幼稚園であった。たみは女今川の素説と仮名文字、時には年丈けた者に薙刀、活花などを教えた。左内は男子に手習を、又三字経の暗誦をさせていた。進んだらどうしたかは分明でない。青年選に時々剣を教え、論語など四書を教えていた。

左内は丈高く、高顎風眼、総髪で、がっちりした肩に木綿の紋服袴で、一種の風貌を持っていた。晩年迄割合に変わらなかった。

現在彼に学んだ男女の生存しているものは少いが、此の地方に彼の与えた影響は相当なものであった。地方剣客選に敬意を払われ、亦晩年も青年の躰の師範として、半年程諸邑に聘せられたこともある。

市川三左衛門の所持した墨絵の不動三尊像が、蕪里の沖の大木善兵衛氏が所持している。もと味道盛実の銘ある二尺八寸の太刀があった由だが、近所の人に貸し(大正十三年の震災の折)で、そのまま返って来ないという。絵は、長六十九センチ、巾二十九センチの絹に墨で濃淡を付け、金線で界線とも光線ともつかぬ締めくくり

がしてあった。顯幽齋六仙讀写□□と金泥でサインがあるが、不分明で、画風は幕末の漢画風のものである。太刀は筑前の金剛兵衛の系統の盛栄(天文頃)のものかとも話の様子から察せられる。彼は山岡鉄舟の知遇を受け、円治を山岡道場にまづけ薫育を頼んだが、鉄舟死後、嘉納治五郎に円治を托した。此の団治が、昭和七年帰って来て父の墓を建てた。歿年時も行年もなく、大木左内墓。碑側に昭和七年夏末男団治建立とある。福善寺には文武両道左内大木先生碑とあるが、碑陰には寄附者の名のみで何の記載もない。

(4)

(大川栄二郎談)

福善寺の院代(「松山戦争」の記事参照)は、使から帰って来て、天狗派の訊問を受けた。知らぬと云えば好かったのに、「そんな者は居りません。」と答えた。屋敷しをすると敵がいたのだ。天狗の一人が銃を打つと、寺の前の駱道から大砲を打ちかけ、仁王門厨が焼けた。現在の幼稚園裏、小学校寄りの所にあったのだ。その院代は駱道の南角にあった松の木の枝に吊され、上を詐わる者として強かに打たれ、せつかんされた。記事にある様に、此の人も名主と共に許されたが、後年爪を噛み、ぶるぶると首を振わすようになり、脚は甚だ不自由であった。

諸生派を追って、天狗達は山の坊に大砲を上げたが、崖の肩の地盤がゆるく、大砲を藪の中に転落させて了った。附近の百姓も

手伝わせて引き上げて打った。しかし大方は田の中、畑の中に落ちて、中台の方までは届かなかった。音響は物凄く威嚇の効は甚大であった。

初めに来た武士達は、戸を締めると云って通り過ぎたが、後から来た武士達は、戸を開けると云って、戸が閉っていると、銃で突で行った。兵糧も、前の武士達の頼んだのを後の天狗達が食べ、戦いの済んだ後、此の天狗共の振舞には街中が地獄を見るの思いだった。銃子で行なつた事を、八日市場では六、七、八、九の四日間存分にやつたのだ。戦勝軍に対しては、維新当初取り締るべき官署も実力者も無かつたのだ。多古の久松も、小見川の内田も、兵漸く五十人、銃二三十といひのでは三百人の天狗達に対して、当らずさわらずであった。」

(福岡明氏談)

十月六日正午近く、西本町鶴泉堂の横町通りの角で、鍋掛屋が仕事をしていると、若い武士と供の老武士が鶴屋を訪ね、食を乞うと老武士は「若様、愚図々々しては居られません。敵が参ります。」と頻りに袖を引いて退去を促しても、若人はなかなか立ち去ろうとせず、更に声を大にして居る所へ十数人が「奸賊!」と大呼して襲いかかった。若人は数人を切り倒したが、老人は忽ち切り倒され、若人も、如何に腕が立っても乱刃の内に倒れた。彼らは忽ち首を刎ね、衣服を剥ぎ取って立ち去った。後で見ると、その股間には毛が無い程の若さであったが、その太刀の捌きは見

事であつた。こう語ってくれたこの鍔掛屋は、下出羽町に棲んでいた倉金某で、明治末年まで存命した。」

私の伯父福岡平二郎は、十月六日大阪の近くに畑を打っていたが、突然鉄砲の音がした。そして今の土木事務所の方から十数人の人が進んで来るのを見た。坂上にかくれて発砲した人達に対して、その人達も打ちつつ進んで来た。それが如何にも美麗に見えた。その人達の物之具の美しかつたのが、慌てて逃げながらも、未だに眼に眨んで来る。勿論大阪はその十数人の為に破られてしまった。……と語る言葉が印象的だつた。

福岡明氏談中の鶴泉堂前の若人は、朝比奈親負ではなかつたか。彼は小姓頭であつた。

又大阪での戦いは、中台を守るとすれば当然の配備であつて、廿五六人を除いては飯倉方面、木積方面に敗走したと考えられる。

多古藩は、兵を出境させはしなかつたが、警戒はしていたので、多古佐原方面よりは飯倉方面が逃走し易く、夜栗山川を渡渉すれば案外逃れ安かつたと思われる。坐右秘録によれば、天狗派は寺門徳太郎をして、川を渉り人数引率、芝山村まで押寄せ、夫より引返し、貝塚と申処に宿陣したと矢野唯之允は報告している。

又桐屋旅館の井戸で首を洗つたというが、堀井権右衛門家の井戸でも首を洗つたと聞いている。その井戸だというのが拙生の幼時には畑の中にあつた。位置は今分明しないが、伊橋医院の前あたりに当るうか。当時の風習として、頭首は持ち帰り、晒し首に

する為塩漬けにするのである。又頭首を担がせられたという話は、拙生幼時しばしば老人達から聞いたものである。

現在匝高の東側、森家の墓地は山ノ坊という山伏寺があつた。そこから谷田を渡り中台へ進む天狗を中台に迎撃し、又路上を進んで来る敵を、旧小学校後の隔離病舎（今は勿論無くなつてゐる）の北方の小高い、大木の繁茂する塚の上から銃撃し、暫くは追討軍も進めなかつたという。兩者戦斗は銃撃が多く刀槍の激斗があつとは余り聞かない。これは他の維新戦争実歴譚に於てもそうである。手詰めの戦いは刀槍であつたろうが。

朝比奈知泉の弔魂碑文中「遺屍二十有五、其ノ一首級無シ。戦熄ンテ後、県司西村ノ吏民ニ命ジ遍ク搜索シ、用水渠ヲ傾瀉スルモ終ニ護スト云ウ。其ノ首級無キ者ハ蓋シ寛政布ナラン。其ノ死分明ニシテ首級水戸ニ伝致サレザルヲ以テナリ。」と首級無き屍を寛政布のものとしてその首を求めている。

ところが、百年祭執行前、富田理介の系統大中さん宅を訪ねた客があり、銚子市八木町在住の常世田喜永氏といい、次のように語つた。

「明治初年、先々代の処へ六部風の人が訪ねて来られ、匿まつていたが、やがて亡くなられた。それから三代、私の家では代々妻が長生きせず、私も三度目の妻にも先立たれてしまつた。突は戦時中庭を畑にしようとして掘り返すうち、隅の方から頭骨が出て来たので懸ろに寺に埋葬した。たまたま脱走塚百年祭の記事を見て

その事実を思い出し、脱走塚との関連に思い当った。あの頭骨の主は六部なのではないか。そしてその六部は脱走隊の人ではないかと思われるのだが、名前は分らぬだろうか。……」と。

思うに、この頭骨は六部のものではなく、むしろその六部が埋めたものではなからうか。そしてそれが寛政布の首級なのではあるまいか。六部が不慮に死んだとしても、其の屍を庭隅に埋置するなど考えられない。それに其の土地八木という処が身を匿すのに好い所であつたらうと、当時の事情など考え合わせて、寛政の首なき屍を思い出すのである。

高崎藩の報告中に、四日夜長崎、松岸河岸についた賊の部隊が不穏であつたので、帰順を説いて返答を待ったが、程なく脱走した。直ちに兵を出して追撃したが、一人を討ちとめたのみで他はとり逃してしまつたというのだが、不思議にも脱走隊は、銚子に於ては帰順者であつても、討たれた者は此の者以外にはないのである。銚子市松岸町良福寺の「円明院受袍翁生信士、廣応四年十月五日」と刻まれている墓は、此の者の墓では無いかと思う。脱走中追撃の銃丸を受けた者の墓であろう。戒名から判断しても：銚子市白石町の鶴沢には明治元年頃には家が二軒しか無く、隠里の様な処であつた。或る日その内の一軒である加瀬本家の主が附近の洞窟に六人の武士が隠れているのを見た。其の内三人は手負いである。早速水車小屋に移して傷の養生をさせていたが、人相書きが廻るなど探索が厳しいので、六人を変装させて逃がした。

五年程経て三人組の強盗に襲われたりしたので、加瀬家では置いてあつた刀などを売り払ってしまったという。

八木、鞍橋、白石等、あの辺の山中は妙に入り込んで隠里の様な処が多いので、此の様な話は多いと思う。此の外、八日市場の下の混地帯には、諸生派の若い男が入婿したらしい話もある。

九十人程の諸生派の中廿五六人が死に、三四人が追捕された。戦争には人員蒸発が付きものだが、同民族の混化は易かつただろう。四散した人員がどのくらいあつたことか。……

大正年間、名古屋で旧水戸藩の所有の銘刀が売りに出され、千葉県八日市場町の田圃から発見されたとの話が新聞に出た。

高瀬羽軍氏の「刀剣と歴史」の中に、明治初年下総八日市場に旧藩公の「助真」を持ち逃げした者がいて、腕ききの者廿五人を撰んでそれを奪回に向寄せた。彼は綿屋という料理旅館にいたが、刀を持って逃げたので、裏の畑中に取り囲んで打ち倒し、刀は取り返したとある。

同じこの話を増田定吉（田町の出身）からも聞いている。彼が憲兵として在籍した時、彼が八日市場の出身だと聞いたその剣道師範が、往時を追想して、「その時自分は一番若かつたし、初めの立合でもあり、堅くなつた。」と云つてその時のことを話したという。これも松山戦争が尾を引いた事件であつたのだろう。



## 松山戦争聞き書き

石井 梵 慧

水戸城廓争奪戦 明治元年九月二十九日（同年十月一日）。

市川、朝比奈等同年十月二日水戸を遁れる。十月三日、銚子（本隊は椎柴上陸）

一隊は椎柴より猿田を経て見広に出て、嚶鳴村後草広原を通り、網戸、旭太田より八日市場に入る。

一隊は飯岡八木を経て海岸に出て共興村吉崎に上陸、城を通り八日市場に入る。城より八石を通り八日市場に入った者もあると聞く。この一隊は傷つきし者が多くあった様に思われる。

各隊共に四日午前九時頃には福善寺に到着本陣となした（庫裡）朝比奈は軍戦を指揮、市川等が迎撃した。市川氏は、今の竜泉堂入口に陣し、鎧に身を包み、二間有余の槍を持しその様相は一人敵を呑む感があったと聞く。（福善寺庫裡は七畝二歩の土地に建ち、現在の裏井戸は其の庫裡の内井戸である。幼稚園の後になる。）

窟谷、籠部田の路上に少々のごぜり合いはあっても大した事はなかつたが、住民は驚怖のどん底に置かれながら、雨戸を締めた、開けたり、のぞいたりしたと聞く。

現市役所の南道路は、堀江権右エ門成敏の土地にして、当時相当の権力と財を持って居った。朝比奈等福善寺に陣するや、炊出しを命じ、金を軍資として出さしめたと聞く。尚井橋病院近くに古井戸あり、其の井戸は堀江家の後井戸にて、首級を洗い、四斗だるにつめたと聞く。

堀江権右エ門一子小伝治（当時十八才）なるものありて、住民の驚怖と戦災を見かね、裸馬に乗り、幕府分駐所（茂原にありしという）に進言しに行つたと聞く。又当市大枝十兵エ氏の先祖は東京四谷より当地に移住し来り、何代目かはさだかならずも、此の戦の災を除くがため、中台高地を指し名したとも聞く。

福善寺に駐したる隊員（諸生派）は九十八人なれど十月四日（四日五夕刻まで陣をとりたるも戦利あらず。朝比奈等相計り（四日夜半）、五日早朝を期して、各自其の職を求め茨に励むよう申し伝えると共に金子を与え、各地に散ぜしめたと聞く。其の協議の時、朝比奈等と運命を共にすることを一同申し出でたるも、懇々と説き訣別したと聞く。説きしも聞かざる者二十有余名は中台台

地を決戦場となし、五日夜福善寺を脱し（裏山を登る）、布陣した。尙其の時座裡に一名を残し、敵に脱れたるを悟られざるようにしたと聞く。時に諸生派の迎撃の少なきを知り、福善寺に押入る（三、四名）や、番棚の蔭にかくれ居し其の一人が一刀のもとに先者を切り捨てたので、敵は、夜半なるためか、諸生派は未だ福善寺に居ると正義派隊長（尼子千太郎）に報告したので、其の夜焼打ちとなったと聞く。

布陣の形は匪高より向って左方に狙撃兵三名、中央に朝比奈、市川氏等、余の隊員は左右に散開のように聞く。

五日朝比奈等と別れ、夏目、幾世の方へ行つた者は、金を住民にかつがせて大寺、鏡木、万才、夏目幾世、飯岡と経て行つたようである。飯岡手前の見広か蛇園あたりで、住民の二名は命からがら逃げ帰つた（田の中に入り）と聞く。

先日見広の島田氏の子息が、春海の小林重郎先生の子息にゆづつたと言われる短刀（天狗派というのが多分諸生派のものと思われる。）を坂倉さんに研ぎに出してあることを聞く。見広、蛇園あたりはその子孫が居るかも知れぬ。

## 編集後記

百年祭執行を期して頒布を予定した記念誌の計画が諸種の事情で延引、遂に今日に至ったことを先ずお詫びしなければならぬ。

最初、現に在る文献を集録し、聞き覚えの伝承も出来るだけ集めて、とにかく一本にまとめようと、割合気安く文献委員会を組織したのだが、いざ始めて見ると、とんでもない仕事を引き受けたものだ、軽率さを思い知らされる場面のみ多く、つまづきながらも諸賢の温い御援助を幸に漸く形を見ることができるようになった。

さて、取りあげた文献の第一は、大川すみえ氏書写による「松山戦争」ですが、原本も分らず、筆者も不詳なのが残念です。片貝騒動の記述に続いた松山戦争の部分を取ったわけで、これは新に発見された「奸賊打取並討死控」の日記に拠ってもその真実性が立証されると思われる重要な現地資料であろう。「奸賊打取並討死控」は、「水府住純真隊大越祥吉書持」と裏表紙に記載のある、半紙二つ折り横長の記であるが、大中こう氏の水戸の親戚（維新後富田家と縁戚にられた大越家）からもたされたもので、追撃隊の側の大変貴重な資料だと思ふ。多数の人名を挙げ最後に日記を整理した態で行動をまとめてある。序に順路を地図に示して添えた。

脱走塚に埋葬された戦死者の氏名の校合表を取りあげたが、一応五種類だけにとどめた。坐右秘録のものも挙げれば、又別の問題も出て来る筈だが、次の機会にゆずることにした。

匝瑳郡誌中の松山戦争の記事は、好くまとまっているし、郡誌そのものが稀少になっているので、大方の目にふれ易いようにここに採録した。

弔魂碑の碑文について、判読のむずかしい部分があるというので、原文を朝比奈知泉文集から引用した。其の誤脱の原因について某老の親切な御教示のあったことを附記する。

「聞き書き」、大川、石井兩名がまとめた。特に「さふさのおちば」は、筆者が二十才当時の聞き書（深田稲治、磯部喜兵衛、直本磯磨等の諸老からの）は、大震災の時東京で失ったので、新に採録したものを骨子とした。誤りがあれば、すべて筆者の罪である。

大木左内の話は、飛田鎮之助と共に記録されて好いと思ひし、今採録しなければ失われると思ひるので敢えて取りあ

けた。

名越時正氏には、坐右秘録、知泉文集等の資料をいただき、その他種々御便宜をお願いするなど、又山本秋広氏の諸著、志摩三郎氏の北総史話、海野正造氏の佐原騒擾の真相等教えられることが多く、ここに更めてお礼を申し上げます。尙採訪に当たっては、仲内憲治氏、大木左内の縁辺の方々、蕪里の大木氏、野榮の伊東氏等の御協力も感謝に堪えない。

尙市教育委員会の方々からは、格別の御協力、御鞭撻を願ったことも附記して感謝の意を表するものである。

昭和四十二年 月 日

文献委員

- |    |     |
|----|-----|
| 大川 | 遯一  |
| 土屋 | 謙四郎 |
| 鳳塚 | 管之助 |
| 石井 | 堯懋  |
| 山崎 | 信治  |